

胃 集 団 検 診 （ 職 域 ）

動 向

平成16年度の職域における胃間接X線撮影検査の受診者数は、45,721名（対前年比101.4%）であった。昨年度より653名とわずかながら増加した。

当協会では、施設や検診車を、デジタルX線装置（CCDR）へ切り替えを順次行い、高精度な検診サービスの提供に努めている。

デジタルX線の特徴は、①直接撮影に匹敵する精度の高い画像データが得られる。②フィルムを使わず、現像が不要。（画像はDVD等のデジタルメディアに保存）③画像をすぐに確認したり、見やすく加工したり、必要なデータをすぐ検索できる、などの利点がある。

受診動向としては、対象年齢に達していながらも法的に実施義務がないことやバリウムに対する嫌悪感などの理由により、受診しない方を数多く見受けられる。

X線検査による胃検診の有効性は、厚生労働省の研究班により証明されており、治癒可能な早期がんの発見のためには、対象者全員が年一回、定期的に受診することが望まれる。

方 法

平成16年度は胃検診車、施設合わせて職域検診に9台の装置で対応してきた。撮影方法は日本消化器集団検診学会の提唱する前壁二重造影像を取り入れた撮影法で行い、造影剤も高濃度造影剤を採用し、より情報量の多い画像の提供が可能になっている。今後更に情報量の多い診断能の高いX線写真の提供に努力していきたい。

また、Aグループへの対応は要精密検査として直接X線検査による精密検査の方法と内視鏡検査による方法とに二分され、内視鏡検査では生検による最終診断まで可能である。

平成16年度において最も期待されるのは新たに導入されるデジタル検診車である。直接X線撮影の情報と同等の画質の提供が可能で、被曝においても直接撮影より軽減が可能になったことは今後の検診システムに変化が生じることも予測される。これによ

り検診のデジタル化が急速に早まることになると思われる。また、画像情報の提供はCD-Rでの提供を考えております。

結 果

受診者数の動向は前年度より僅かに増加した。男女比は例年どうり大きな変化は無い。Aグループの協会受診する団体の要精密検査は13.4%で前年度より1.1%増加している。これは高濃度造影剤の採用による効果と考える。精密検査を受診した人は1,833人で53.2%とやや低下してきている。精密検査受診率は年々減少傾向にあり関心度が薄れてきていると考えられる。せっかく検診を受診し異常を指摘されても放置状態では胃がん検診の効果はない。精密検査受診群から発見された胃癌は12名0.7%と前年度0.2%に対して高率であった。これも高濃度造影剤の効果と考える。胃ポリープ及び胃ポリポージス373名、胃潰瘍及びその癒痕は146名、十二指腸潰瘍及びその癒痕は127名、共存潰瘍及びその癒痕20名、その他の疾患は472名と何らかの疾患を持っている人は1,150名62.7%と高率を示している。

問題となる未受診者対策は協会では把握できない部分でもあるが、精検未受診であった1,611名については何らかの方法で受診勧奨が必要である、その第一の理由は1,833名から12名の癌が発見されていることである。今後少なくとも要精密検査の指示がでたら必ず受診してほしいと願わずにはいられない。

関係の集計表は70頁に掲載